

その他

第二次世界大戦の波間にて

東京都 佐々木 譲 二

私は昭和七年フィリピンが米国の植民地であった時代にマニラで生まれ、小学校時代をマニラで過ごした。当時の植民地は宗主国が理想都の市作りへの意欲があった、米国がスペインに次ぐ美しいマニラ市を作った。

太平洋戦争勃発

昭和十六年十二月八日、月曜日の朝登校したが、校門の石階段の上に先生が立ち「ハワイで戦争が始まった」すぐ家に帰るように指示された。「ハワイで戦争が始まった！」この意味がよく分からなかったが、

家に帰って母に伝えたときの母の姿が、今でも鮮やかに記憶にある。そして、毎年十二月八日がくる度に、恐ろしい日であったことを改めて思い出す。

戦争勃発に備え、あらかじめ決めていた近くの南天寺に集合し、大同貿易株式会社の社宅に疎開した。

この社宅のゲートと要所要所に、早速、米兵の格好をしたフィリピン兵がヘルメットを被り、小銃を持ち、敵対心をあらわにして進駐して来た。噂話が囁かれ、だれ某がモンテンルパに拘束されて行ったなど、有名なばかりであった。

威張りくさっていたフィリピン兵がいつの間にかいなくなつた。情報が入っていた大人には、日本軍がどこまで来ているかが分かっていたのであろう。我々子供は、突然一月三日の皇軍マニラ入城に驚かされた。

社宅のゲートの両側に日の丸の小旗を振って、万歳万歳の邦人の出迎えを受け、日本軍が入って来たときは、例えようのない感激を味わった。

大同貿易株式会社から昭和十七年一月、マニラ市内に戻る。多くの在留邦人が、疎開中に家財道具一切、著一本残らず略奪されたと聞いたが、我々は、大家のクユガン氏が判事であっただけあって、また氏の屋敷内に家があつたため、保護され略奪被害は全く無かつた。

昭和十七年一月、マニラ日本人小学校の授業が再開され、二年近くは、戦時中であつたが平和な日々であつた。

海軍軍需部学童動員

昭和十九年八月ごろ、六年生のとき（十二歳）、先生が教室に一人一人を呼び、住所はどこか、港に近いかを問われた。何のことか分からなかつた。が、ある日突然、海軍軍需部の運動場に集められ、海軍式敬礼、分隊行進、海軍体操などの訓練を二、三日受け、イカリの徽章が付いている軍帽、鉄兜、制服の支給があつた。しかし、制服は大きくて着られないので返した。

マニラからの急遽脱出と父との別れ

昭和十九年十二月二十八日か二十九日ごろ、レイテ島の戦況が米軍側に有利になり、均衡が崩れたのか、急遽マニラ市から父を除く一家六人が、サンホセ市の教会にひとまず疎開した。

教会の中はさながら今日の阪神大震災の避難所の中の光景であつた。そこでは、中嶋君のお父さん（牧師）が不安がつている在留邦人婦女子を優しく労つておられたことを鮮明に覚えている。

ここサンホセにおいても、米軍の空襲があつた。これまでの空襲は、すべて艦載機グラマン戦闘機であつた。機銃掃射が主で、教会の付属建物にいた二級上の久住さんが、偶然にも彼だけかぶつていた鉄兜に弾が当たり、弾は地中に落ちて難を逃れた。

バヨンボンに落ちのびる

戦況が更に悪くなり、間もなくルソン島のほぼ中央部のカガヤン平原穀倉地帯を北に通る抜け、その先のルソン島の中央部を東西に横断している山脈バレテ・サラクサス峠を越え、峠を下つたところのマニラから

約三百キロメートルの平和な町、バヨンボンに移動した。

このバヨンボンに移動したときの交通の便は、日本陸軍の食糧を積んだトラックであり、小生と兄と機関銃を握った兵隊さん一人が、その食糧の上に乗る、サンホセを出発した。昼間の米軍の空襲を避けるための夜の行動であった。

夜は夜で、峠越えの山中でゲリラがどこから射撃してくるか分からないので、十分注意するようにと申し渡された。いよいよ危険が迫ってきたなと思った。この緊張とは対照的に、峠の山中で初めて聞く鈴虫の音が寂しく聞こえ感傷を誘った。

このころの日本軍のトラックは、非力で峠道を登るのに、今にもエンジンが止まるのではないかと思うほど、喘ぎ喘ぎ、歩行と同じ速度で登った。このトラックは、支那事変のころのトラックで余り改良がなされていないなかった。

中嶋君のお父さんは、峠を越える手前のカガヤン平原で、日中米軍機の機銃掃射を受け、大勢乗っていた

中でのただ一人の敬虔なクリスチャンに弾が当たるという不運に遭った。

バヨンボンには一日ぐらいいたのか、すぐ北部のボンファルの町へ移った。ここで小学校の教室のような部屋に、一、二日いたが、マニラの学童動員先の海軍軍需部に来ないかとの誘いがあり、ソラナ町の軍需部に私の一家族六人は移動した。

軍需部本部は、ルソン島北部アパリに通じる大通りの左側にあった。ここには一カ月近くいたではなかったかと思う。ある日、ボンファルの日本人会から、別送していた大きなリュックサックが届いた、との知らせがあり、兄とそれを取りに行った。

そのリュックサックを兄と籠担ぎのようにして大通りを歩いて帰っていると、上空に米軍のロッキードP38戦闘爆撃機が旋回しているのに気が付いた。そのとき、日本軍のトラックが二、三台通りかかったので「兵隊さん敵機がきていますよ」と注意した。トラックは五、六十メートルぐらい先の大きなアカシヤの樹の下に隠れて止まった。

我々二人は、そのトラックの方向へ近づくように歩いていった。いくらか歩かないうちにあのロッキードP38が操縦士の顔が見えるぐらい超低空で、我々の頭の上で機銃掃射を始めたので、二人は道路脇の窪みに目を押さえ、口を開け伏せた。一機が去ったのでその場を移動しようとする、間髪を入れず二機目が轟音に近い機銃掃射をしてきた。伏せた頭の少し先に弾が撃ち込まれるような音がし、もう駄目か！もう駄目かと機銃掃射を繰り返される度に思った。何回旋回してきただのか、こなくなつたと思つたら、樹の下に隠れていたトラックが燃え始めた。敵機は燃えるのを確認したかのように飛び去っていった。

二人は我に返り、その場を去ろうと二、三メートル先を見ると、まだ煙がでている機関砲の葉きようが五、六個落ちていた。これが当たつても怪我をするが、幸運であった。

トラックの燃えるのは凄まじく、ガソリントンクに引火したのか爆発を起こし、二、三台が連なつて火柱を上げて燃えていた。そして近くの民家にも燃え移り、

見ていたくもあり怖くもあり早々に。

九死に一生を得たケースがこれまでに三回あった。

確かに怖いことは怖い、これが最期か、なるようになれ！と思つているうちに恐怖のピークは過ぎ、我に返つたとき、体はどこも痛いところがない、大丈夫だ！ああ助かった！というときの気分は、何とも言えない。

ある日の午後、突然転進命令が出た。日本人会の一団は、ソラナを真直ぐ北上してバガバグ方面に転進したが、われわれはソラナを左に西北の方向のアゴブに入った。翌日聞いた話によると、ソラノはあの晩ゲリラの夜襲に遭い、町は全滅、そこにいたら死んでいた、とのことであった。諜報活動が生きていることを知った。この後アゴブから、六月六日脱出する際も同じ経験をした。

二月このアゴブに入つて以来ほとんど毎日、海軍陸戦隊の銃を担いだ護衛付きの担架に、乗せられた病没葬列が、本部の前を通り埋葬地に向かった。多い日には五、六体のこともあった。埋葬地に行くとき真新しい墓標や古い墓標があり、総数ではかなりの数であった。

何とも言えない気持ちであった。

この時期の戦病死者は、皮肉な言い方でなく、立派な葬儀をしてもらい幸せであったと思う。山岳部に入ってから戦病死者は埋没の穴を掘る力も全員なく、名目だけの穴を掘り薄い土饅頭にしただけのものは、その晩のうちに猪が食い荒らしているのがほとんどであった。

ウジャワン部落に急転進

アゴブの土地の人たちを周りに見掛けなくなった。バレテ峠の応戦も、ついに崩れたらしく、六月六日ウジャワン部落に急転進した。先にも書いたが、アゴブを発ったその夜ゲリラ攻撃に遭い、村は全滅であったと聞いた。

六月中旬、ウジャワン部落では、夕方から猛然な砲撃弾が頭の上を弧を描いて通り過ぎて行った。ニュース映画で、大砲を無茶苦茶に撃つ場面がある、その弾道の下にわれわれはいたことになる。二秒間隔ぐらいの発射音か、着弾音か物凄い音がしてきた。加えて夜陰と篠突く雨の中、いよいよ危険が迫って徒歩で丘を

下り、濁流の川岸に出た。兵隊さんに前後で支えてもらい胸の上まで濁流に浸かり、やっとのこと対岸に着いた。真っ暗であったから怖くはなかったが、もし、見ることができたら尻込みして渡れなかったであろう。しかし、後ろからどんどん撃ってくるので、渡らないわけには行かなかった。

ジャングルの山の中に入る

この川がアシン河なのか？もし、アシン河ならば、上流で日本人会の婦女子が、たくさん流され溺死したと聞いている。そして、我々が渡河した地点は邦人が渡河した地点からおおよそ三十キロくらい南の地点であった。

たどり着いた河岸から間もなく峻険な岩場を暗いうちに登った。明るいうちは米軍の攻撃目標になり、大変危険であったらしい。更に登るとジャングルの中に入り、米軍からは直接見えなくなり最初の中継所に着いた。熱帯雨林とはよく言ったもの、雨…雨の連続。先遣隊が設営した小屋は、直径五、六センチの丸太で作っており、屋根はジャングルの中の広葉樹の葉っぱ

で貰いてあり、雨漏りがする。床も丸太を渡し、三十センチ下には泥地面が見える出来立ての小屋であった。

しかし、この小屋を作った人には感謝しなくてはならないし、この小屋に入れただけでも幸せであったと思わなければならない。なぜならば、一時でも濡れた足を乾かせたからである。であるが、横になっても背中が痛く、それもそのはず、七、八センチ間隔の間のある丸太の上に敷くものもなく、横になっているのであるから、魚を焼く網の上に横になっているようなものであった。

三カ月後、終戦を迎え、この小屋の前を通ったとき、白骨死体が何体か横になっているのを見た。その白骨を処理できる余力のある者はだれもいなかった。

このようにして山中に逃げ込んだが、そのときの心境は正確な情報が分からず、皆の言う「三月になれば新編の陸海空の精鋭部隊が戦況挽回に来る、それまでの我慢だ」との望みで日々がただ事でないにもかかわらず、明るい先の見通しがあることにより、単純であった私は悲惨を悲惨とも思わずに過ごした。

翌日も雨……。後方で機関銃の音がするため、せき立てられ先を急いだ。我々が逃避した山中とは、地図の上には地名もない山岳高地帯であった。千古来斧鉞よこぎを知らない原始熱帯雨林、ラワン樹の上に空が見えないジャングルの、泥田のようなぬかるみを歩き、初めは紐状でしかなかった尺取り虫の蛭が足首に食い込み、銅貨のように変形するほど血を吸い、無理に取ると頭だけ残ったりした。

日暮れが迫り炊飯をするため濡れた枯れ枝に火をつけるのに乾いた焚き付けがなく、お札のペソ軍票を燃やして炊事をしたりした。お金をこのように燃やすならば、何故おいしいものを買って食べなかったか。大人は悔やんでいた。

炊飯をする時間も日暮れ時のみで、明るいうちに火を燃やすと煙が砲撃の標的になり、日が暮れてしまい暗くなつてからは明かりが標的になると、ご法度を言いわたされた。

重い荷物をここまで運んでくれたカラバ水牛が動けなくなつたため、兵士が屠殺し肉の配給をしてくれた。

十分な小屋の屋根下がなく、濡れながら一夜をまどろんだこともあった。マリアの高熱にうなされた軍人軍属が多数いた。なかには、生きながら口に蛆が湧き、「兵曹（海軍は殿を付けない）私の口の中に蛆がいます！取ってください！」歯肉に食い込んだ蛆はなかなか取れず、口に血が溢れ、口を濯^{すす}げ！濯ぐ水は無く、泥水が流れているのを掬って濯ぎ、「お願いします！」と苦悶していた兵士がいた。

連日の恐怖と地獄の中で発狂する者があり、既に物言わぬ人がいたり、平地では葬儀を懇ろに行つたが、このジャングルの中では葬儀もなく路傍に置き去りにされ、無情と言うか、我が身を保つことが精いっぱいであった。後方でまた撃ち合う機関銃の音がし、せき立てられまた逃げた。

終戦を迎え下山するとき、白骨死体が叢の中に点々としていたのを道標にしたが、登る途中に亡くなった人たちであった。

人間、戦時と平時がこうも異なるものなのか。生きながらの地獄と、平時の死者を弔う懇ろな葬儀との

格差のなんと大きな違いか。平時の葬儀はその人の繋がりのある人は皆威儀をただし、御霊の安らぎを祈り、葬送をしてくれ、初七日、四十九日、と家族には大切にされ、なんと平時の素晴らしいことかと思う。それに比べ山中で亡くなった人は、だれも顧みてくれず、一人で朽ちるしかなかった。母も、父も、妻も、子たちも、見えず、聞こえず、無念であつたでしょう。

三日目、雨の晴れ間ができ、その地獄を通り過ぎやつとのことで、突然眺望のきく秘境に出たときは嬉しくなつた。山岳イゴロット族の桃源郷であつた。家は高腰のニッパハウスであるが、少し平地のものとは違つた。家の出入り口には猪の頭蓋骨を数珠繋ぎにして垂らし、数の多さで家の勢力を誇示しているように見えた。

この秘境は山の斜面に水田を作り、俗に言う千枚田か、小さなたんぼを段々にし、稲耕作をしていた。もち米であるから小豆色なのか？その米にありつき、雑炊を食べることができ嬉しかった。その他の畑は斜面を耕しサツマイモを作り、われわれ日本人が逃げ込ま

なければ、平和な秘境であったことでしょうに。百人前後が生活するのに理想な人口であるところ、何千何万人もの日本人が入り込んで来たのだから、稲田の糶も畑のサツマイモもたちまち無くなったのは当然であった。

弟の死

昭和九年生まれのすぐ下の弟の病が呼吸困難に変わり、母の看病も空しく七月十二日亡くなった。隣の土間に寝ていた私は、弟の口に蠅がとまり、口の中に入ろうとするので、弟にしつこく口を閉じるよう注意すると、初めのころは聞き入れていたが、次第に気力がなくなり譲君（私）は嫌い！と言ひ、心底から憎いという目をした。今でもその目を覚えている。死ぬということが分かっていれば優しく蠅を追ってやったのに、勘弁してくれ、悔やまれてならない。

弟の土葬は兵隊さんが一メートル以上の長方形の穴を掘ってくれ、僧侶と読経はないがしめやかに行われた。子を亡くした母の気持ちはいかばかりであったか。穴の底に弟を入れたとき、頭を土に着けると、そおっ

と置くのでなく、乱暴に置く音がした。痛くなかったか！皆泣き震えながら土をかけた。雨は降っていないなかった。供えた花が奇麗であった。

二カ月後終戦になり、この墓地の二十メートルぐらい上手の道を通ったとき、あの辺りに弟がいるのだけれど、いかんせん草が胸以上の高さに茂っており、弟の場所が特定できず、骨を拾うこともできず、皆で涙を流し別れを告げた。

弟が亡くなったころの七月七日、父はルソン島北部の東海岸の山中で病死したと、父が勤めていた海軍病院関係者から戦後聞いた。

戦争が無ければ桃源郷であったであろうこのキャンプには、続々と後発の人があの生き地獄を通り抜けたどりで着いて来た。息も絶え絶えやっと着いた人ばかりであった。

あるとき、突然、陸上からの機関銃襲撃にあった。至近距離を「ヒューン、ヒューン」と弾が通る音がした。皆窪みに伏せたが陸戦隊兵士がすぐ応射し、危急を間もなく脱した。

発狂し、炎天下白い蚊帳をかぶり懸命に天を仰ぎ、合掌して読経する人がいた。敵の目標になるから降りてこい！と命令されても、無私の境地にいるものをどうすることもできない状態であった。

ある時は、米軍輸送機が谷底へ向かって落下傘につけた物資を投下した。兵士が「すわ食糧だ！」と銃を持ち谷底へ向かった。が、程なくして谷底から猛烈な射撃音がしてきた。射撃音が両側の山にこだまして轟々と響いた。留守のものは全員蒼白な顔になり、谷底へ向かって兵士を心配した。が一人も帰ってこなかった。十日後には次の安住の地を求めて、西十キロくらいの所へ移動した。

この小屋のある場所は、敵の稜線の上で眺望の良きところとで逃避するものには、敵の標的になり易い不向きな場所であった。案の定セスナ観測機が飛んできて、迫撃砲攻撃を受けた。このタイプの攻撃を受けたことのある経験者がいた。彼いわく、セスナ機がきたならば、セスナは何回か旋回して砲撃を誘導する。まず、一発目は我々がいる場所と砲撃発射地点との中

間点に着弾させ方向を決め、二発目は距離を測るために近い場所に落とし、三発目セスナ機が旋回して遠ざかるうとしたときは逃げるとうことであった。

彼が言うとおりに、谷間に向かって逃げた。彼は空へ向かって十字を書き、何か呪文を唱え目を閉じた。

「シュル、シュル、シュル」と物が落ちてくる音に次いで「ドカン」と至近距離で砲弾が炸裂した。四回目セスナが旋回してきて標的に命中したことを確認すれば、四発目は撃ってこない。もう大丈夫だと言うことで元いた小屋の場所に戻ると十坪ぐらいの小屋に砲弾が命中していて、さっきあった小屋がどこにも全く無かった。七、八メートルのところに岡兵曹の片足があるのみであった。

セスナ機が遠ざかったとき、耳を澄ませ聞いていると、遠くで迫撃砲の発射音が微かに聞こえる。そして何秒か後、「シュル、シュル、シュル」と物が落ちてくる音の次に「ドカン」と弾がくる。怖くもあるが興味もあり眺めていた。

住む家が無くなり、次の南東斜面の木立のある山の

中腹の、元いた場所からそう遠くない場所に七月末ごろ移った。ここは山中最後の地で、終戦後下山するときまでここに住んだ。四坪弱の高床でなく、珍しく板の床であった。そして、われわれ一家族だけであった。五、六メートル下った所に一軒あり、更に十二、三メートル下った所に、軍需部長志村大佐と運輸部長早川少将がおられた。

ここには千枚田は無く、全部畑であった。畑のさつま芋は掘り尽くされ全く無かった。掘り残しの芋から濃いピンク色の芽がほんの少し、二ミリ斜めの地面を割って出ているのを放浪者のように、毎日毎日探し歩いた。

この芋の芽は目をつぶるとイメージに浮かび夢にも始終現れ、戦後も二、三年続いて夢を見た。この芽の下には思いもよらぬ、命の糧になる大きな神々しいお芋さんが出てくることがあった。早速、麻袋に入れ母が喜ぶ顔が見たく、足も軽く小屋に急いだことがあった。芋の葉や茎、軍人が南方春菊という青物を毎日持ち帰った。

目が覚めれば、地面を割って出ているピンク色の芋の芽ばかりが目にはらつき、飢餓の子は姉や兄について芋畑を毎日さまよった。ある日は一日中歩いたが麻袋にはなにもなく、兄は目に涙を浮かべ「お母さんもう何もないよ」と言って帰って来たときの情景は、今でも忘れられない。もうこれでおしまいか、と言う望…。

それでも朝になればまた畑をさまよい、ピンク色の芋の芽があっちにも、こっちにもあり小躍りして行くときは、また夢と希望が皆にわたり小屋の中が明るくなった。

余勢をかってまた畑をさまよい、いつものように「ピンク色の芋の芽」は無く絶望して草原に入り休んでいるとバナナの良い匂いがし、どこかにバナナがなっているはずとバナナの木を見てもなっていない。しかし匂う。不思議だと周りを漁ったら地獄に仏のような立派なラカタンバナナ一房が、叢の中に辺りを幸せにするような格好で鎮座していた。周囲を見渡しだれもないことを確認し、脱兎のように小屋に急いだ。

幽霊のような無機質な体にも、虱しむやダニにとつては
まだ吸い取る栄養があるとみえて、散々悩まされた。

猿のグルーミングのように虱を取り、ダニは皮膚の柔
らかいとこの毛穴に巢食い、直径八ミリぐらいに皮
膚が腫れ、そのクレーターの真ん中に居座っていた。

そのダニを茨の針で掘り出す作業を懸命に行った。
その格好は第三者が見ると吹き出す格好で作業を行っ
ていた。われわれはそのダニを赤い虫と言った。

姉と兄の話によると芋畑でイゴロットの親子に遭遇
した。姉はもう駄目だと地面にしゃがみ込んで覚悟を
決めたが、イゴロットの側も驚いたらしく、恐る恐る
何か書いたものを見せられ、「このイゴロットは純良
な一家につき友好的に接しられたい」〇〇警備隊長と
あったとのこと。

この小屋には壁が無く周囲に柱が四本あるのみであつ
た。なけなしの米を五、六キロ柱の内側に置いてあつ
た。いつまでこの生活を続けるか分からず、手を付け
ず大事に残していた財産であつた。が、朝起きてみる
とそれがない。よく考えてみると、前日の夕方「種火

をください」と言つて来た男、我々の小屋のすぐ下の
空き家に得体の知れない男が来たのを思い出した。す
ぐ警備隊に伝えたが、もぬけの空であつた。盗難にあつ
たのはこれが初めてであつた。

そして、いつしか「新編の陸海空の精鋭部隊が援軍
として来る」夢は消え、聳え立つ山岳の頂上から向か
いの山の頂上まで、マニラ市内で見たことのない鸛こうのとりの
ような大きな白い鳥が、人間の苦悩と全く別な世界を
おおらかに鳴き、悠々と飛んで行く様を虚ろな目と頭
で眺める日が多くなつた。

終戦

ダグラス輸送機が悠々と飛んできた。そして、八月
十五日過ぎセスナがきて戦争が終わつた旨のピラを撒
いた。「天皇陛下の終戦宣言」「広島、長崎に新型爆弾
を落とした」「ポツダム宣言」「投降した日本兵の談
話と写真」にわかには信じられず二、三日が過ぎた。

軍使が交渉に出、順次投降するよう指示があり、健
康な人であれば一日で歩けるところ栄養失調で体力の
限界に近い状態であつた、われわれ一家は恥ずかしな

がら四日くらいかかり下山した。

下山

下山一日目の小屋で塩谷さんが夜、ウワゴトを言い始め「アンパンを食べたい」「カツ丼を食べたい」「だれだれによろしく言ってくれ!」翌朝亡くなっていた。ここまで頑張ったのに!。

弟の墓に行きたいが叢が密集していて近づけず遙拝するのみで他に方法はなく、後ろ髪を引かれる思いで通り過ぎた。母の思いは、いかばかりであったか。細道の両側の草の中には白骨が続き、連れて帰りたい、付いて帰りたい、様々な思いを残して通り過ぎた。

あの入山の時の魔のジャングルの中にまた入った。

下りなので歩くのは早いはずであるが足が紙一枚の高さも上がらない状態であったため難渋した。気持ちが悪かったのはどの小屋の中にも白骨が何体もあって、その中で休むことができなかった。幽霊も人魂も燃えるリンも何も無かった。恐らく幽霊、人魂、燃えるリンは平時の生活に飽きた、生き地獄を経験したことのない人が想像の戯れを言っているに過ぎないことであ

ろう。

ジャングルを抜け出し元登った岩の断崖を下りることなく、畑の小高い丘を登る中間で日が暮れた。バナナの木が群がる斜面で野宿した。寝入りかかると滑り落ち、寝たとも寝なかったとも分からなかった一夜であった。朝ほんの少し登った所に逃避行中最後の小屋があった。かわいそうとしか言いようのない、陸軍の伍長の徽章を付けた兵隊さんが外で死んでいた。話によると昨日終戦を信ぜず米軍に斬り込み、射殺されたとのことであった。この亡骸を埋葬してあげる気力と体力のある者はだれもいなかった。

悲しかったのは、終戦を知りながら力尽きて亡くなった人が多かったことであった。私も何度か母や兄弟に「私を置いて先に下山してくれ」と言った。私は脚気で足が腫れ、自分の意のままにならず、陰囊まで腫れ、あと一週間か十日下山が送れたならばこの世に生存していなかった。

八月末か九月に入ってたか? 最後の小屋で一夜を明かした翌朝、小屋の裏の丘の中腹に米軍の陣地があり、

そこへ投降した。米兵は日本人の婦女子が珍しいらしく、末の弟（七歳）を抱き上げ木の株に座らせてかわいがった。が、私は思うように動かぬ足を引きずり、四つん這いで登り坂を登った。鬼畜米英の思想を植え付けられていたので、米軍の前に出たときは、被告人が裁判席につくように大変に恐ろしかった。早速、持ち物を改められ下山するよう指示された。

姉、兄、弟は先に下山したが、私には母が付いていてくれ、亀よりも遅く四つん這いで歩き、いったん丘を登った。丘の上からは米軍のGMCトラックのエンジン音がすぐそこに聞こえるが、足は動かさず、母にまた先に行くってくれと言ったが、母はずっと付いていてくれた。健常者ならば三十分もあれば下山するところ、私は母に付き添われ、また日が暮れ、ラワン樹の自然倒木が小道を遮るように横になっている下でまた野宿した。

翌朝、幾らも下山しない間に平地に出た。平地には原住民がおり腕時計は全部取られた。住民の中には両腕に時計を何個もはめ、得意満面な者もいた。バカタ

レ！ 首を切る格好をしたり、アナック・ナン・タクツポ（逃亡者の子）、ありったけの罵詈雑言を道の両側から浴びせられたが、手だしはしなかった。罪人の市中引き回しのように、住民の罵声の中、二、三キロ歩いて、鉄条網を張り巡らせた投降地の婦女子のみの収容所に入った。

昭和二十年十月十六日ころ、収容所からマニラ港に送られ、日本の海防艦に乗り込んだ。船内で出された御飯・みそ汁・梅干しに、涙を流したのも束の間、台風に遭い、五・六日間は荒海の航行であった。四国や九州の山を見ながら瀬戸内海に入り、十月二十三日、広島の子品沖にやっと着いた。夢に見た本場の日本が目の前にあった。

【執筆者の横顔】

佐々木讓二氏は昭和七年フィリピン群島マニラ市で生まれ、マニラ日本人小学校二十六回生で、私の六年先輩となります。

戦時下、小学校六年、十二歳で学童動員があり、軍

の仕事がされた。昭和十九年十二月ご家族六人でルソン島北部の山に逃げ入り、そこで弟さんを亡くすという悲惨な体験をなさっています。お父様も現地召集され戦死されています。

何とか郷里の広島に引き揚げ、昭和三十年東京に出られたときに、渋谷の我が家に兄を訪ねて見えられませんでした。その後、度々お会いする機会がありました。この度礎の原稿をお願いしたところ、私の履歴書前編（A5判八十二ページ）と題したものを送ってくださいました。何と彼は着実に計画をたて、一生悔いなく過ごすための努力をされておられました。この小冊子には十二歳までしか過ごしていなかったマニラ時代の例えば、小学校のこと、友達のこと、近所のこと、毎日の出来事、お菓子、果物に至るまで克明に記されているのです。引揚げ直後ならいざ知らず、五十年経った今日に著したものです。私は敬服すると同時に懐かしく思い出させていただきました。

昭和三十一年フィリピン貿易を専門にしていた会社就職されて以来四十年。

現在は、定年後、健康を管理されている最愛の奥様と二人の御息、二人のお孫さんに囲まれて履歴書後編等書かれるゆとりある人生を歩まれている由。今日のお幸せは十二歳の時までに極限のご苦勞を味わい尽くされた賜物ではないでしょうか。

（東京都引揚者団体連合会

常務理事 大平 禮子）

北部ルソン山岳地帯逃避行

東京都 北島 華江

昭和十九年十二月、当時私は数えて二十歳でした。

が、六人兄妹の末っ子で、今、思い返しますと非常に世間知らずで、幼なかつたようです。父東寶隆はフィリピンルソン島にある禅宗の曹洞宗（福井県、永平寺が大本山と聞かされておりました）南天寺の二代目住職で、私が一歳半のとき、病没。長兄が跡を継いでおりました。その兄賢重も現地召集で軍籍に在り、当時、